

आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市横島町千足80

宮沢賢治は日本少女歌劇座の公演を見たのか？

京都文教大学・京都文教短期大学図書館館長

総合社会学部 実践社会学科・教授(社会学、大衆文化論) 鵜飼正樹

「日本少女歌劇座」という巡業少女歌劇団のことを調べ始めたころ、ネット検索でひとつのブログ記事が目にとまった。宮沢賢治が大正時代に盛岡で日本少女歌劇座の舞台を見たとする記事だ。1923(大正12)年5月、盛岡の劇場に歌舞伎を見に行くといっただけで出かけた賢治は、終演後、ひと晩かけて花巻まで歩いて帰ってきたとされるが、この時期に盛岡の劇場で公演していたのは歌舞伎ではなく日本少女歌劇という歌劇団だったので、それを見たのだと思われる、そういう趣旨の記事だった。

当時の新聞を調べてみようと考えて、国会図書館で『岩手日報』のマイクロフィルムを繰ってみた。するとたしかに、1923年5月1日から6日まで、日本少女歌劇座一行が盛岡劇場で公演している。「何分にも初御目得の事故万事敷御声援の程伏願上候」という挨拶状と演目の紹介、さらには「明一日正午花々敷く当市へ乗り込み町廻りの上午後正五時開場の筈なり」という予定まで記事になっていて、前評判も高かった様子がうかがえる。

盛岡の前に福島、新潟で公演したことも書かれていた。これを手がかりに、東北、北陸の新聞のマイクロフィルムを検索してみると、1923年1月に大津、2月に名古屋、3月に金沢、4月に富山、福島を経て、盛岡に至る巡業コースが判明した。

新聞各紙は巡業先でのトラブルも伝えている。金沢の舞台を見て「華やかな舞台で楽し気に踊る女優たちの生活に憧れ」、家出して富山の劇場まで追いかけて「女優にして下さいと楽屋へ座り込」んだ娘を「懇々訓戒して」帰宅させたが、再び家出した模様で、父親が富山署へ捜索願を出した(『北國新聞』)。昨年9月に家出し「流浪の果か歌劇団に入った」娘の母親が「肺病に罹り幾度か娘を手許に呼び寄すべく書信や電報をだしたが

其の都度親分のため没収されて了つた」ため、郡山署が説諭にあたった(『福島民報』)。

ところで、タイトルの疑問である。宮沢賢治と日本少女歌劇座に接点があったのか。

宮沢賢治には、「春水星少女歌劇団一行」など、少女歌劇団をモチーフとした一連の詩がある。中にはプラットフォームや列車が出てきて、巡業先の風景をうたったもののように感じられる。そこに、自身が盛岡劇場で見た日本少女歌劇座のイメージが反映しているのではないか。

しかし、決定的な証拠がない。

実は、国会図書館が全国の図書館等と協同で構築している「レファレンス協同データベース」でも、「ネット上に「宮沢賢治も、花巻からチャップリンの映画や少女歌劇などを見に(盛岡劇場へ)通いつめた」という記載があったが、これを確認できる資料はあるか」という質問が岩手県立図書館に寄せられ(質問者は私ではない)、「宮沢賢治が盛岡劇場に通っていたことを直接裏付ける資料は確認できなかった」という結論が出されている。

一方で、賢治が亡くなる1933年9月までに、日本少女歌劇座は1923年5月、1925年3月、1926年6月、1927年6月、1928年6月、1930年10月、1932年8月と、盛岡で7回も公演している。また、ソプラノの美声を売りものとしたトップスター・児島光子は盛岡の出身で、盛岡公演は「郷土訪問」として大きく報じられた。地元紙に童話や詩を投稿していた賢治は、こうした公演の記事や広告を見たはずだ。

もしも宮沢賢治が盛岡で少女歌劇を見たとしたら、それは日本少女歌劇座だった可能性が高い、くらいのことは、いえるだろう。

(うかい まさき)

🍃 書を持ち、町へ出よう！ 🍃

総合社会学部 実践社会学科長・教授（会計学、商学） 舛井雄一

あ一ゆす第51号は「実践社会学科開設記念号」としての発刊という運びとなりました。学園創設120周年の記念すべきこの年に、この記念号に寄稿できることは大きな喜びである一方、学科長としては大きな責任を感じております。今後の更なる発展のために一筆献上致します。

実践社会学科は、総合社会学部のなかに設置された新たな学科ですが、今までの学科とは多くの面で違いがあります。その学びの特徴はその名の通り地域社会や企業活動の現場で「実践」するなかで、自分の得意なこと、好きなことを伸ばし、社会の仕組み、チームの動かし方、プロジェクトの推進方法など社会で活躍するためのスキルを高めていくことにあります。実践から学ぶ、身体的な経験を伴いながら評論家的な知識ではなく、現場で活かせる知恵を身につけていきます。学科のモットーは「まずはやってみる！」。やってみて、その結果を振り返る。振り返りで気がついたポイントや教訓をさらに現場で実践していく。これを繰り返して成長を図っていきます。

今回、実践社会学科開設記念号のお話をいただいた時に「実践社会学科の学びと図書館ってどんな話ができるんだろう？結構難しいかもしれない」と考えてしまいました。学生たちに学びの特徴を伝える際にも、本を読んで勉強することよりもまずはやってみようという経験を促す場面が多かったからです。現場実践を標榜するこの学科は大学の組織でありながら「書を捨てよ、町へ出よう」を地でいく学科なのか？それとも…？

それでは、その点を考えていくためにまずは実践社会学科がどうして「まずはやってみる」を標榜しているのかを考えてみたいと思います。大学で学ぶ分野の中でもいわゆる理系とか自然科学系と呼ばれるものは子供の頃から直感的に楽しさを感じて好きになることがあります。皆さんも子供の頃、クワガタなどの昆虫や恐竜に夢中になったり、星空を眺めながら宇宙に想いを馳せたことがあるのではないのでしょうか。それに対して、社会

科学系では子供の頃から自然と興味を持つようなケースはあまり多くはないでしょう。僕たちは社会の中に生きていて、恐竜や宇宙よりもはるかに身近な存在なのにも関わらず、そこに自然と興味が湧くことが多くないように思います。

では、どのように興味を深めていくのか？それが「まずはやってみる」という体験、実践なのです。経済でもまちづくりでも社会は本来、身近な存在のはずですが、それにはなかなか気づきません。そこで、地域や企業活動の現場に飛び込んで経験し、その中で学生たちの心の中にある感性に訴えかけます。学生の心の中に楽しい、もっと上手くやりたいなどという思いが出て来てくれたらしめたものです。そこから面白い、知りたい、できるかもしれないという気持ちに繋がり意欲が高まっていき、更なる実践につながっていく。そのための仕掛けがこの学科にはたくさんあります。

こうした実践と図書館の接点がここにあります。つまり、実践から得た経験が心を響かせるためにはその心の中にたくさんの琴線が必要です。琴線のない心には何をしても響くものはないでしょう。その琴線を育てていくために豊かな読書体験が役に立つのではないのでしょうか。まちづくりのプロジェクトに参加している学生であれば、まちづくりの様々な活動事例を知っていることで自分がやっている活動と他の活動の違いに気づき、その新規性にワクワクすることがあるかもしれません。また、本のなかに書いてあったことを実際に現場で経験し、「あれはそういうことだったのか」と感じて面白さに気づくことがあるかもしれません。また、豊かな読書体験は自身の活動の経験を振り返る際にも有用でしょう。

本学が存立する京都・宇治は学生の琴線に触れることができる素晴らしいフィールドがたくさんあります。本学の図書館にも多くの蔵書があります。学生たちよ、「書を持ち、町へ出よう」！

（ますい ゆういち）

読書は自己と他者を発見する営み

幼児教育学科・講師（社会福祉、子ども家庭福祉、社会的養護、ソーシャルワーク） 木内 さくら

みなさんは、一番初めにおもしろいと感じた本は何であったか覚えているだろうか。この寄稿にあたって、改めて自分の本との記憶を手繰り寄せてみた。

物心つく頃から、物語に惹かれてきた。昔話や童話のミニ絵本を少しずつ買ってもらい、いそいそと本棚に並べていた。同じ展開の物語であっても、挿絵やセリフが違ったりすることも面白く感じていた。絵と文字でわかりやすく伝えてくれる絵本から、成長と共に文字だけの本がわかるようになる、ミステリーのような謎解き要素が強いものを今度は好んだ。謎がクリアになっていくことの面白さが、私の最初の読書体験なのかもしれない。小学生向けのアガサ・クリスティ作品やシャーロックホームズシリーズなどは、絵本から文字だけの本への移行を手助けしてくれた。

冒頭で触れた、最初におもしろいと感じた本として私が一番に思い浮かぶのは、小学校5年生時に読んだ『モモ』（ミヒヤエル・エンデ作 岩波書店 1976）である。母が、従姉が好きな本として勧めてくれていると言って買ってきてくれた。読み始めた直後から、「どこにも行かずにこれを読み続けたい」と、読書経験の中で初めて感じたことを覚えている。物語の展開はもちろんだが、文章表現に驚き、もっと読んでみたいと思ったのである。『モモ』は、モモという不思議な少女と灰色の男たちの闘いの話、というのが簡単なあらすじであり、扱われているテーマは時間である。モモは不思議な亀の導きで、ある場所で不思議な人に会い、時間を体感するような場面がある。時間の流れを可視化しているその場面の一連の表現に、当時の私は衝撃を受けた。小学生で読んだ直後から、当に大人になった今でも、「時間の流れというものはああいうことなのか」とふと思いついたりもする。目には見えない感覚のようなもの、つまりは抽象的なものを表現するというものを、『モモ』で初めて知ったように感じたのかもしれない。未読の方はぜひ読んでみてほしい。

本を読むということには、様々な目的や理由がある。私は『モモ』以外にも、素晴らしい小説や専門書に出会ってきた。小説であれば物語の展開だけでなく文体や表現に惹かれ、専門書であればその着眼点に惹かれ、学びを得た。私の読書の目的にあるのは、他者の視点・考えや表現方法を知りたいということなのだと思う。それは今の自分の研究分野の出発点でもある。

小説や専門書など、全ての本には当たり前のことだが書き手がいる。書き手が試行錯誤して練り上げた視点や表現が、本の中にはある。自分では考えつかないような内容が、知らない言葉ばかりで書き連ねられているときもあれば、知っているはずのことを容易な言葉で的確に捉え、表現しているものもある。新鮮に感じるけれど、どこか懐かしく、知っているはずの感覚を、様々な言葉で紡いでいる。本を読むと発見があるのは、全く知らなかったことを知ることばかりではない。自身の感情や感覚を、他の人の視点や表現によって更に知ること発見なのである。現代はインターネットやSNSが普及し、全ての人が自分の考えを第三者に向けて表現できる場が多く存在している。感じたことを素直に書くことの素晴らしさはある。一方で、言葉や物語、知識を消費していくスピードが、とてつもなく早くなっている社会でもあるだろう。自分が感じたことを、同じように感じている人がいると知るとは強みだが、直感的に発された言葉だけでなく、練り上げられた表現に出会うことも大切である。

読み手側の自分も、その時点での自分はその時にしか存在しない。初めて読んだときには難解であったり、テーマや内容が頭に残りにくい本もあるだろう。早すぎる出会いが本にもあるが、何度でも本に出会うことができる。言葉や表現、物語を受け取る自分自身の変化や成長は、自らの本に対する解釈もまた変化させる。ぜひ、“今の自分”のうちに、本の中にある表現に出会ってほしい。

（きうち さくら）

*** 私の世界を広げる本 ***

総合社会学部 総合社会学科 メディア・社会心理コース3年生 寺田有希

本は「私の世界を広げてくれる存在」であり、単なる情報の集まりではなく、私の感情や思考を豊かにし、新たな視点を提供してくれる大切なものです。読書を通じて得た学びは、私の思考を深め、自己表現の重要性を教えてくださいました。また、自己分析をするきっかけにもなり、本との出会いは私の人生に影響を与え、成長へとつながっています。

まず、私の視野を大きく広げた本として、西野亮廣の『革命のファンファーレ 現代のお金と広告』（幻冬舎 2017）があります。この本は、現代社会におけるお金の流れや広告の力について深く考えさせられる内容で、「自分がどのように・どのような価値を社会に提供できるのか」というテーマに強く共感しました。西野氏の実践的なアドバイスや挑戦的な考え方に触れることで、私は自分のキャリアを真剣に見つめ直し、「私はどんな価値を発信できるのか？」という視点を大切にできるようになりました。この本を読んだ後、私はフリーランスとして働くことを目指し、自由な発想を活かした仕事をしたいと思うようになりました。特に、ウェブデザイナーというクリエイティブな仕事に興味を持ちました。自分のアイデアを形にして、社会に新しい価値を提供したいという思いが強まり、これからのキャリアに向けて情報収集や勉強に努めています。

次に、小説の魅力を再認識させてくれた本として、森博嗣の『すべてがFになる』（講談社ノベルズ 1996）が挙げられます。この作品は、私に叙述トリックの楽しさを教えてくださいました。物語が進むにつれて予想外の展開が繰り広げられ、ページをめくるたびに新たな発見があります。登場人物の心理や状況が巧妙に絡み合い、最後に「なるほど！」と驚かされる瞬間は、この本ならではの体験です。私はこの本を通じて、物事をただ表面的に受け取るのではなく、深く考え、先入観にとらわれないことの重要性を学びました。この読書体験が、私の好奇心を刺激し、その後も推理小説やミステリー作品に挑戦するきっかけとなり、読書の幅を広げることができました。

さらに、最近読んだ『変な家』（雨穴著 飛鳥新

社 2021）や『変な絵』（雨穴著 双葉社 2022）も私に強い影響を与えました。これらの作品は、独特な視点で描かれた不思議な世界観が印象的で、日常の中にも非日常が潜んでいることを感じさせてくれました。特に『変な家』では、家の中に潜む謎が巧みに描かれ、日常生活の中で物事を多角的に捉えることの重要性を改めて実感しました。

これらの本を通じて、私は自分の創造性や発想力をさらに鍛えてきました。ウェブデザインの仕事では、ユーザーが思いもしない驚きや新しい体験を提供することが大切だと感じています。これらの作品から学んだ視点は、今後のデザインの仕事に必ず活かしていけると信じています。これからも新しい本や経験との出会いを大切にしながら、自由な発想を形にできるウェブデザイナーとして、また人としても成長していきたいと思えます。

私にとって読書は、ただの趣味にとどまらず、自己成長のための重要な学びの場です。読書をし、様々な物語と触れ合うことで新たな視点や感情を得ることができました。さらに、私の成長において本が果たす役割は、自己理解にも深く関連しています。読書を通じて、自分自身の内面を探求し、他者との違いや共通点に気づくことで、自己理解が深まります。このプロセスは、自分自身の強みや弱みを認識し、人生の選択肢を広げる助けとなります。本から他者の経験や思考に触れ、自分の価値観を再評価するきっかけにもなっています。さらに読書は、私にとって単なる個人的な体験だけでなく、他者とのつながりを深める手段でもあります。本を通じて得た知識やストーリーを共有することで、友人や仲間との会話が豊かになり、より深い理解と共感を育むことができるのです。これらの経験を通じて、私は本が与えてくれる影響の大きさを改めて実感しています。未来に向けて、私はさらに多くの本と出会い、さまざまな経験を重ねることで、自分自身をより深く理解し、成長していきたいと考えています。読書は、私にとっての冒険であり、自己成長の旅でもあるのです。これからもその旅を続けていくことで、より豊かな人生を築いていきたいと思えます。

（てらだ ゆうき）

✿✿✿ 私のすすめる3冊(実践社会学科編) ✿✿✿

新任教員より1冊ずつ紹介していただきました

◎ 「忘れられた日本人」

宮本常一 著 岩波書店 1984

「江南君、宮本常一って知ってる？」私が大学院生だったある日、フィールドワーカーだった先輩が「こんな文章を書けたら良いよね」と微笑みながら教えてくれた1冊である。

白眉は「土佐源氏」だ。ひとりの老人が絞り出した、その人の息遣いまで聞こえてきそうな言葉が、玉や璧の如く散りばめられている。もし、非構造化インタビュー法を知りたいのなら、ぜひ一度目を通してほしい。人の話を聞くことの奥深さや面白さに気づくはずだ。

准教授(社会学、地域研究) 江南健志(えなみ けんじ)

◎ 「ザ・シークレット」

ロンダ・バーン 他3名 著 角川書店単行本 2015

この本は、プロデューサーであり放送作家であるオーストラリア出身の著者と、著名な哲学者・科学者らの共同作業で作られた。アメリカでシンドロームになり世界中に翻訳され広まった。

私がこの本と出会ったのは韓国のフィールドのときだった。読み始めたときは「いいことを考えればいいことが起きる」というなんて当たり前のことを言ってるんだと思ったが、読み続けると違う世界がみえてきた。

この本は100年も前からごく一部の人にしか知られてない「秘密」を一般の人にも広めたいという著者の思いから出版された。その秘密とは「引き寄せる力」。ポジティブなキーワードで考えることでポジティブなことが起こるということだが、例えば「失敗したくない」のではなく「成功するんだ」と考える思考。同じ意味のようだが、「引き寄せる力」は否定の言葉は無視し「失敗」と言う単語だけ引き寄せるという。本では同時に願いを叶えるための道具として方法も紹介される。

今でも私は時々縁に任せてランダムに開いたページからこの本を読んだりする。何か常識から抜け出したいとき、つまずいたときぜひ手に取ってみてほしい。

講師(社会学、国際移動、東アジア地域と移民、ダイバーシティ) 許燕華(きょ えんか)

◎ 「江戸の旅文化」

神崎宣武 著 岩波新書 2004

「いとおしき子には旅をさせよ」、「万事思ひしるものは旅にまさる事なし」(浅井了意)。こんな文言が登場する本書は、江戸時代の一般庶民による旅が主題となっています。当時の旅は、現在の旅行よりも厳しいものでした。しかし、本書からは、旅人たちが名所見物をし、名物を食べ、土産物を買うなど、旅を楽しむ様子がわかります。江戸の旅は、私たちの想像よりも愉快で、多くの学びに溢れ、制度化されたものでした。この本を読み終わる頃には、そんな旅をしている江戸の旅人たちのことを羨ましいと思うかもしれない、そんな1冊です。

講師(人文地理学) 谷崎友紀(たにぎき ゆき)

◎ 「弱いつながら 検索ワードを探す旅」

東浩紀 著 幻冬舎 2014

何かを知ろうとする時、現代の私たちはWeb検索から始められる便利さを手放すことが難しくなりました。しかし、多くの環境ではその履歴が自動分析され、その人の見たいであろう情報ばかりが予測表示される仕組みになっています。またSNSでは、似た意見や関心を持つ者が結集する構造があります。そんな環境から抜け出すために、旅をしたり、生活に偶然性や“ノイズ”を取り入れたりすることを著者は提唱します。そうすることで、システムが予測できないその人なりの“検索ワード”や、バイアスのない“弱いつながら”を見つけることができるのです。

私は、偶然性が人生を豊かにするという考え方から、この本に共感しています。もしこの本をどこかで偶然見つけたら、気軽に読んでみてもらえると嬉しいです。

講師(現代アート、デザイン、地域とアートプロジェクト) 谷本研(たにもと けん)